

Rikoh ティータイムシンポジウム「ワセダで輝く・ワセダから輝く、アナタの未来」開催報告

2015年12月10日理工系研究者を対象とした「Rikoh ティータイムシンポジウム『ワセダで輝く・ワセダから輝く、アナタの未来』」が理工学術院とキャリアセンター協力のもと、西早稲田キャンパス55号館1階大会議室で開催され、研究者や技術者を目指す学部学生・大学院生と助教・教員・研究者支援に関係する職員が一同に集まり、30名を超える参加者が耳を傾けました。



冒頭、開会の挨拶として早稲田大学男女共同参画推進委員会副委員長の所千晴先生（理工学術院教授）より「今後みなさんが研究者・技術者になっていく過程において、研究や仕事とプライベートの両立について考えなければならない時がいつか来る、その時にうまくすごしてもらいたい」と今回のシンポジウムを企画しました、ロールモデルとして先輩方の話を聴いて考える時間にしてもらいたい」と、この会の目的が告げられました。



一人目の講師、株式会社富士通研究所の菅坂玉美氏からは、早稲田大学を卒業してから現在までの仕事とライフイベントが紹介されました。「一生研究で生きていくと思っていたけれど、研究結果がビジネスに活用されず、新たなアイデアが会社で活かされない日々が続くという研究者としての壁にあたった時、どうしたらいいかと悩みました、そして組織を動かしているのは文系の人達で、その人達と話をしなければ解消できないと思い、それからビジネスを勉強した結果、現在は企業のマネジメント職に就いています」と、企業の中での歩みとプライベートが語られました。「周囲に助けられ、会社の人達に助けられながら生きてきました、自分では予想もしないことが起こり、人生は思い通りにならないものだけど、それでも頑張りすぎず、頑張ってきた」と、ご自身の経験を踏まえた言葉で伝えられました。



二人目の講師、高等研究所助教の折原芳波先生からは、学部時代から今までの研究者人生を振り返り、沢山の壁を乗り越えてきたご経験をもとに、言葉を選びながらも研究者の道の険しさ・厳しさが語られ

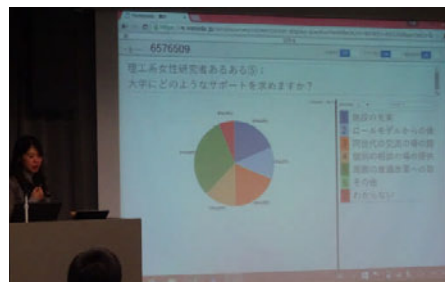


ました。学部時代、初めての国際学会発表時に、『女性』『若い』『日本人』という3つのデメリットを貴方は持っている」と言われたことについて、デメリットをどう活かすかは自分次第であること、自分の強みを活かすことができたからこそ研究を続けてこられたこと、研究者になるには基礎が必ず必要であること、同じ研究分野の学外の人とのつながりや研究とは違う仲間とのつながりが大切であるということが伝えられました。

お二人の講演後の質疑応答では、参加者よりプライベートに関する事や研究人生についての様々な質問が寄せられましたが、講師のお二人は一つ一つ丁寧にお答えになっていきました。

シンポジウムの後半は、参加者が自分のスマートフォンやPC・タブレットから指定のサイトにアクセスし回答するとリアルタイムで集計結果やグラフが表示される早稲田大学の専用ウェブ版クlicker「わせポチ」を使った参加型形式で進行されました。「理工系研究者あるある」「理工系女性研究者あるある」と題していくつかの質問が会場に投げられ、結果を見ながら登壇者と参加者の意識が共有され、会場の一体感が生まれました。次回のシンポジウム開催時期についても問われ、2016年度の開催時期は春学期が望ましいという結果をもって第一回のシンポジウムが閉会となりました。

参加者からは、「具体的な経験や考えを聴くことができ、これまでのキャリアを築いてこられたことがわかりやすく話され、非常に参考になりました」「今後の人生設計を考えるうえで今日知ったことを参考にしたい」「研究者にとって女性という問題がこんなにも多いことは驚きでした」「社会の中での理系女性の立場を知ることができてよかった」「今まで参加した様々なイベントの中で、最も自分に必要なことが聴けた、これからの研究者としての自分に直接的なアドバイスとなるものだった」という言葉が寄せられました。



以上